



中部の

# エネルギーを 築いた人々

京阪電鉄の事業を基礎に、大同電力副社長、合同電気社長  
など電気事業経営に関わった **太田光熙**

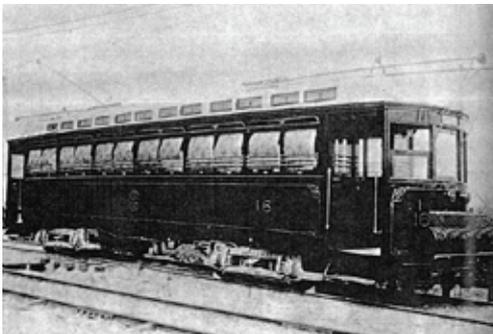
太田光熙(1874~1939)は京阪電鉄の事業を基礎に、電気事業においても活躍した関西経済界の実力者である。明治7年10月、山口県の名家、大庭景明の四男として生まれ、後に勤王家太田小太郎(豊前出身)の養嗣子となった。養父太田小太郎は、維新の際王事に奔走し三条実美の徴士となったが、明治5年伊勢山田の備前屋に入り神苑会の創設、参宮鉄道、宮川電気の創設・経営に尽力した。太田光熙は明治31年7月、東京帝国大学法科大学英法科を卒業、同年12月に高等文官試験に合格した。翌32年6月、逓信省書記官兼事務官となり、同省が所管していた鉄道作業局運輸部勤務を命じられた。新橋運輸事務所長(35年12月)等を経て40年4月帝国鉄道庁運輸部庶務課長となったが、同年9月依願免職となり、設立早々の京阪電気鉄道に入社した。



太田光熙  
出典『京阪70年のあゆみ』

## 京阪電鉄社長・会長

京阪電鉄は、大阪天満橋・京都五条間46  
キロを結ぶ電気鉄道として、明治39年11月、  
岡崎邦輔、林兼吉郎、渡辺嘉一らが中心とな  
って創立した。新会社の専務取締役渡辺嘉一は、  
養父太田小太郎が参宮鉄道社長時代に技師長  
として仕えたことがあった。渡辺は運輸部庶



京阪電鉄最初の電車  
出典『京阪70年のあゆみ』

務課長の太田光熙を訪ね、適任者の推薦を願  
い出たが、結局太田自身が京阪電鉄入りする  
ことになった。

京阪電鉄入社後、太田は総務課長として、  
官庁との折衝をはじめ、路線の選定、用地  
買収などに手腕を発揮し、明治41年12月に  
は支配人となった。建設資金の調達や車輛  
事故対応などに苦  
労しながら、43  
年4月、開業に漕  
ぎつけた。太田は  
43年11月取締役、  
44年1月専務取  
締役となり、多  
忙な社長土居通夫  
(大正元年~6年)、



岡崎邦輔  
出典『京阪70年のあゆみ』

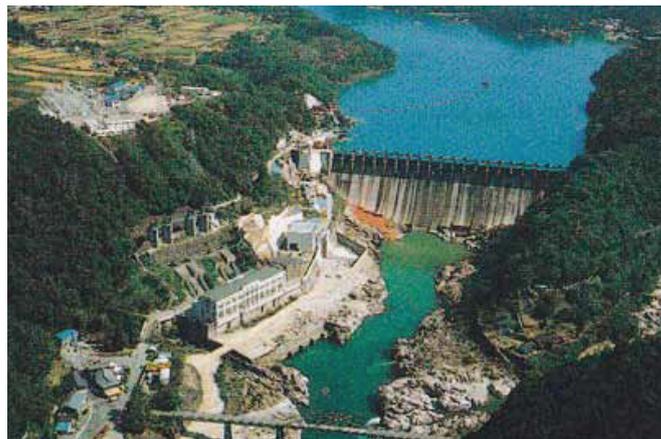
岡崎邦輔(大正6年～14年)を補佐し、実質的に会社経営を担い、社長の岡崎邦輔が農林大臣となった後を受けて大正14年4月から昭和11年10月迄の12年間社長を勤めた。大戦ブームのなか、路線の延長・拡大を進めるとともに、大正元年10月摂津電気買収、同11年7月和歌山水力電気合併、同14年2月京津電気軌道合併、同15年3月日高川水力電気を合併するなど事業の拡大をはかった。



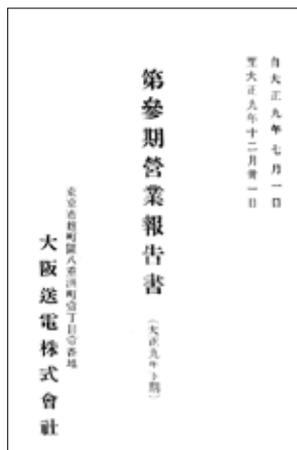
新発足後の京阪三条駅 出典『京阪70年のあゆみ』

## 大阪送電常務・大同電力副社長

京阪電鉄は、大阪に電鉄運転用の毛馬発電所(1700kW)を設けており、明治43年8月には電気供給事業の認可を受け、兼営事業として、京都、大阪の沿線区域に電灯電力の供給を開始した。事業拡大とともに沿線以外にも供給区域が広がり、和歌山水力電気を合併し和歌山県にも事業を拡大した。大戦ブームで電力需要は増加し、水力電源の開発が求められた。当時、木曾川の水力開発を進めていた福沢桃介は、電力消化のため、大阪地域への進出を目指しており、両者の戦略が一致し、福沢の申出を受ける形で、大正8年11月、両者折半出資により、木曾川水系の電力を大阪方面に送電する大阪送電株式会社が設立され、福沢が社長に、太田は常務取締役役に就任した。大阪送電は、154kVの送電線工事



大同電力大井発電所ダム 関西電力提供



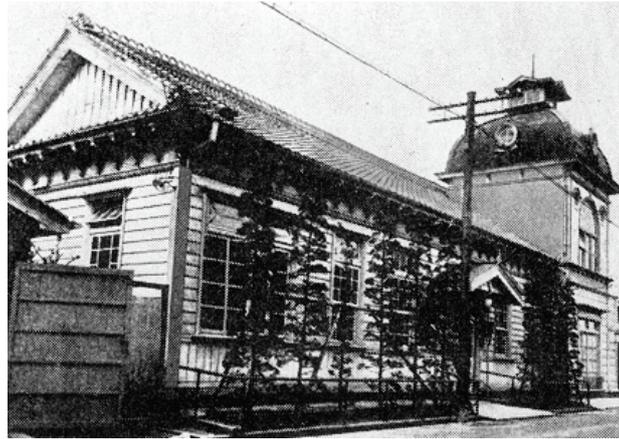
大阪送電 第三回営業報告書

や、木曾川筋に水力工事を進めたが、設立4ヶ月後の大正9年3月には反動恐慌が起き、事業の整理統合が求められた。翌10年2月、北陸方面で水力開発を進めていた日本水力、木曾川の水力開発を進めていた木曾電気興業および大阪送電の3社が合併して大同電力が創設された。同社の社長は福沢桃介、太田は常務取締役役を経て副社長に就任した。

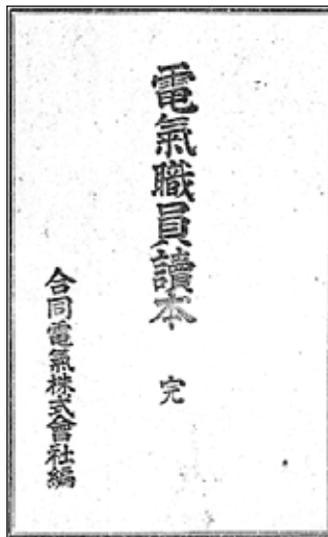
## 三重合同電気取締役・合同電気社長

太田は三重合同電気の取締役にも就任している。養父小太郎が創設に関わった伊勢電気鉄道(明治36年2月に宮川電気を改称)は、宇治山田市および周辺への電気供給と電車事業を営んでいたが、大正11年5月、津電灯、松阪水力電気と合併し、三重合同電気として再発足した。太田は養父小太郎の逝去後(大正5年)家督を相続し、父の事業を継いで三重合同電気の役員に就任している。同社は昭和5年1月、合同電気へと商号

を変更し、同年5月に東邦電力から奈良支店・四日市地区また京阪電鉄から和歌山支店(旧和歌山水力電気の電気事業・電鉄事業)を買収し、太田は社長に就任した。京阪電鉄和歌山支店の買収は、拡大路線を進めてきた京阪電鉄が昭和恐慌で経営困難となるなかで実施されたもので、両社の社長であった太田の意向が働いたものであろう。合同電気は本社を三重県津市に置いたが、供給区域は三重県だけでなく、岐阜県(昭和7年3月、東邦電力区域に変更)、奈良県、和歌山県から徳島県(三重合同電気時代の1923年10月、徳島水力電気を合併)にまで拡大した。この合併を経て供給面や資金面で東邦電力の影響が強まり、昭和12年3月、合同電気は東邦電



合同電気本社(津市) 出典『東邦電力史』



合同電気「社員讀本」  
出典『三重の電気史』

力に合併され、11月太田は東邦電力副社長に就任している。

このように、太田は京阪電鉄の事業を基礎に、沿線各地に電気供給を行い、福沢系の大阪送電、大同電力に関わりを持ち、また三重合同電気や合同電気の経営を担い、東邦電力とも関係を深めた。太田は京阪電鉄の再建が軌道にのった昭和11年10月、社長職を辞し会長となった。この間、阪和電鉄会長、国東鉄道社長、日本ディーゼル工業・

東洋電機製造取締役など多くの事業に関わったが、昭和14年10月、食道癌で逝去している。66歳であった。豪放磊落であったが、部下には温情熱い人物だったという。

(浅野 伸一)